

みや た
宮 田 遺 跡

生目通線住宅地関連公共施設整備事業（新大塚工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

宮崎県埋蔵文化財センター

みや た
宮 田 遺 跡

生目通線住宅地関連公共施設整備事業（新大塚工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、生目通線住宅宅地関連公共施設整備事業（新大塚工区）に伴い、平成15度に宮田遺跡の発掘調査を実施しました。

今回の調査では、隣接する県指定大淀6号墳関連の古墳時代の遺構等は検出できませんでしたが、古代から中世の遺構や遺物が検出され、この大塚地区に古代から人々の生活が営まれていたことが確認されました。このような先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料が多数得られたことは大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で広く活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となれば幸いです。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、地元の皆様方に心より謝意を表します。

平成16年2月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 米良弘康

例　　言

- 1 本書は、生目通線住宅地関連公共施設整備事業（新大塚工区）に伴う事前調査として、宮崎県教育委員会が実施した「宮田遺跡」の発掘調査報告書である。調査は、宮崎県土木部宮崎土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 2 発掘調査は、平成15年6月20日から平成15年8月18日まで実施した。また、整理作業及び報告書作成も平成15年度に実施した。
- 3 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1図『宮崎市』を、遺跡の周辺地形図等については宮崎市都市計画図の1万分の1図を基に作成した。
- 4 現地における実測図の作成は、南正覚雅士、重留康宏が担当した。
- 5 本書で使用した写真は南正覚、重留が撮影し、空中写真については宮崎県文化財調査・サポート協同組合に委託した。
- 6 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・遺物実測及びトレースは、南正覚、重留が担当し、整理作業員の協力を得た。
- 7 本書の執筆は第Ⅰ章第1節を和田理啓（県文化課）が、その他の執筆・編集は南正覚が担当した。
- 8 土層断面及び土器の色調は『新版標準上色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に拠った。
- 9 本書で使用した方位は、座標北（座標第Ⅱ系）を用いている。レベルは海拔絶対高である。
- 10 本書で使用した造構略号は次のとおりである。
土坑…S C ピット…S H
- 11 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と環境	1
第4節 調査の経過	4
第5節 基本層序	4
第Ⅱ章 調査の記録	
第1節 調査の概要	5
第2節 遺構	5
第3節 遺物	7
第Ⅲ章 まとめ	17

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 宮田遺跡周辺地形図	3
第3図 宮田遺跡グリッド配置図	3
第4図 宮田遺跡基本土層柱状図	4
第5図 1号土坑実測図	5
第6図 宮田遺跡遺構分布図	6
第7図 宮田遺跡北壁側土層断面図	6
第8図 宮田遺跡トレンチ土層断面図	6
第9図 出土遺物実測図(1)	8
第10図 出土遺物実測図(2)	9
第11図 出土遺物実測図(3)	10
第12図 出土遺物実測図(4)	11
第13図 出土遺物実測図(5)	13
第14図 土師器(壺・皿)法量分布図	13

表目次

第1表 出土遺物観察表(1)	14
第2表 出土遺物観察表(2)	15
第3表 出土遺物観察表(3)	16

図版目次

図版1 宮田遺跡全景(西から)	18
△ 宮田遺跡完掘状況(南から)	18
図版2 遺物(16)出土状況・1号土坑完掘状況・出土遺物(1)	19
図版3 出土遺物(2)	20

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

生目通線住宅地開通公共施設整備事業（新大塚工区）は、大塚町から国道10号線を結ぶ都市計画道路として、同地域の交通網の整備と交通渋滞を緩和する目的で平成10年度から事業が開始された。

新大塚工区の建設工事予定路線は、県指定大淀6号墳の隣接地を通過することから、工事により同古墳の周溝が破壊される可能性が考えられたため、県文化課では官崎土木事務所と協議を行い、平成15年3月に確認調査を実施した。その結果、当初予想された大淀6号墳の周溝は確認されなかったが、溝状遺構やピット及び中世の遺物が確認されたため、同年6月20日から8月18日まで県埋蔵文化財センターが発掘調査をおこなった。

第2節 調査の組織

宮田遺跡の発掘調査は下記の組織で実施した。

調査主体 宮崎県教育委員会

調査機関 宮崎県埋蔵文化財センター

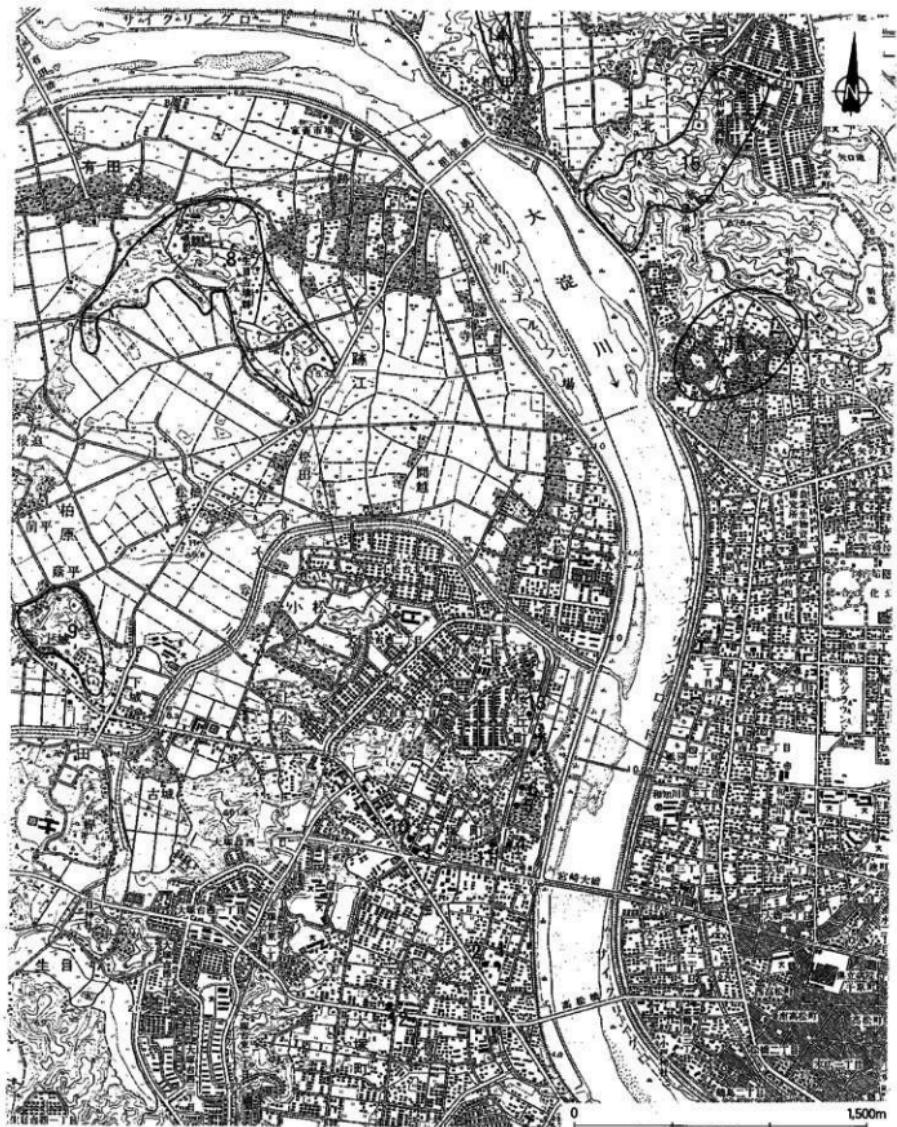
〈平成15年度〉発掘調査・整理・報告書作成

所長	米良 弘康
副所長兼総務課長	大薗 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課主幹兼総務係長	石川 恵史
調査第二課調査第三係長	菅付 和樹
同 主査	南正覚雅士
同 調査員	重留 康宏

第3節 遺跡の位置と環境（第1図）

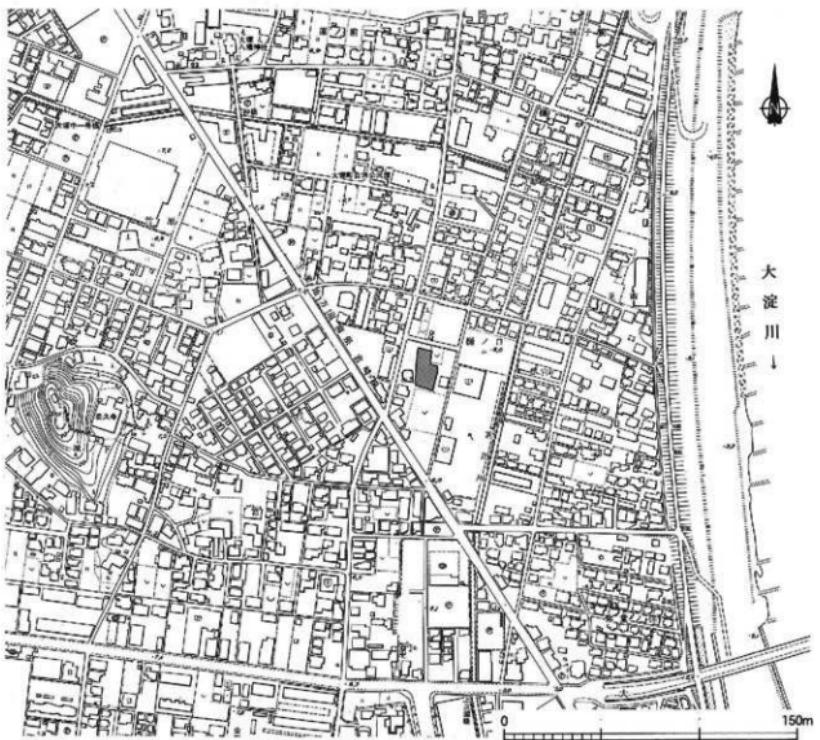
宮田遺跡（第1図-1）は大淀川下流域右岸の宮崎（沖積）平野低地に位置し、標高約6mを測る。当遺跡の周辺は戦前は水田地帯であったが、戦後は急速な宅地化により当該地も宅地・工場地として利用されていた。以下、本遺跡の周辺遺跡について概略を述べる。

当遺跡の西方3mには昭和12年に県史跡に指定されている大淀古墳群（前方後円墳3基、円墳3基、横穴墓1基から構成）中の一つである大淀6号墳（第1図-2）が位置する。現況では墳丘の東側3分の1程が削平を受けていた。北西には大淀1号墳（第1図-3）が所在する。昭和57年の宮崎市教育委員会が行った調査で、粘土郭の痕跡が確認されている。さらに、昭和62年に県文化課が行った調査で円墳であったことが立証されている。北には大淀3号墳（第1図-4）が位置する。全長100m級の規模を持つ4世紀末の前方後円墳で、現在は後円部が残存するのみである。大淀3号墳からさらに北にいった微高地には椎現昔遺跡（第1図-5）・多宝寺遺跡（第1図-6）・竹ノ下遺跡（第1図-7）が確認されている。椎現昔遺跡では弥生時代後期の竪穴状遺構と中世の溝状遺構が、多宝寺遺跡及び竹ノ下遺跡では古墳時代後期の集落跡が確認されている。北北西には3世紀後葉から6世紀後葉に造営された国指定史跡の生目古墳群（第1図-8）があり、前方後円墳7基、円墳29基、横穴墓5基、地下式横穴墓19基が分布している。

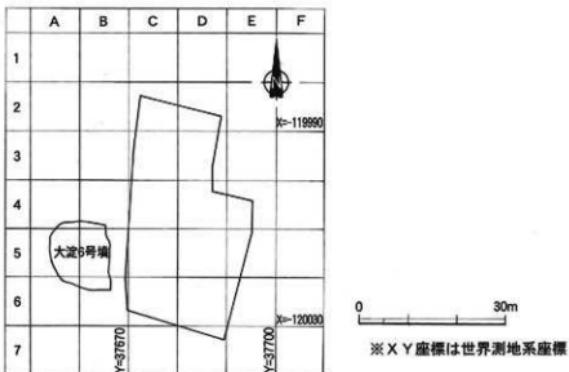


- | | | | | | |
|--------------|---------|------------|-----------|-----------|----------|
| 1 宮田遺跡 | 2 大淀6号墳 | 3 大淀1号墳 | 4 大淀3号墳 | 5 椿原昔遺跡 | 6 多宝寺遺跡 |
| 7 竹ノ下遺跡 | 8 生目古墳群 | 9 生目横穴墓群 | 10 大淀2号墳 | 11 大淀4号墳 | 12 大淀5号墳 |
| 13 大淀古墳（横穴墓） | | 14 瓜生野横穴墓群 | 15 池内横穴墓群 | 16 下北方古墳群 | |

第1図 遺跡位置図 (1/25,000)



第2図 宮田遺跡周辺地形図 (S=1/2,500)



第3図 宮田遺跡グリッド配置図 (S=1/1,000)

第4節 調査の経過

宮田遺跡は宮崎市大塚町字宮田に所在する。今回の調査対象面積は770m²である。

生目通線住宅宅地関連公共施設整備事業（新大塚工区）に伴って平成15年6月20日より調査を開始した。まず試掘により調査区全体の造構及び遺物包含層の確認を行った。その結果、建物跡のため搅乱の著しい調査区南側320m²を調査対象面積から除外し、北側と南側の一部450m²について調査を実施することとした。調査に当たっては、位置関係の把握と測量実測の基準とするために、国土座標に合わせた10mグリッドを設定し、東西方向は西からA・B・C……、南北方向は北から1・2・3……の順に名称を付した。

調査方法は土層観察用ベルトを中心にはぎながら、第Ⅱ層までを重機により慎重に除去した後、包含層（第Ⅲ層）を人力により掘り下げ造構検出を行った。乾燥すると非常に硬くなる土質のため掘り下げは難航したが、調査区の北側部分で土坑、ビットを検出したほか、土師器、須恵器、陶磁器等が確認された。第Ⅳ層上面での調査終了後、同層以下の造構等の有無の確認を目的に調査区北隅及び西側にトレーナーを設定し試掘を行った結果、遺物・造構とともに検出されず平成15年8月18日を以て調査を終了した。

発掘調査に際しては、調査期間が梅雨時期と重なったうえに、第Ⅱ層から第Ⅳ層までが粘質土であったことから、雨天時には調査区一面に雨水が溜まり、排水作業にかなりの時間を費やさなければならなかった。

第5節 基本層序（第4図）

本遺跡の周辺は、第二次大戦前は耕地（水田）として利用されていた。戦後は、宅地等にするために水田に客土を施し平坦にする造成が行われた。そのため上層については本来の層序を留めていない。しかし、下層の堆積状況は良く、基本層序はおおきく第Ⅰ層から第Ⅳ層の4層とした。

基本層序			
第Ⅰ層	褐灰 (7.5YR 4/1)	20cm	表土。客土であり遺物は含まない。
第Ⅱ層	褐灰 (10YR 5/1)	20cm	旧耕作土（水田跡）。シルト質で若干の遺物を含む。 下部には鉄分が沈殿している。
第Ⅲ a層	黒褐 (10YR 3/1)		シルト質で非常にしまりがある。
第Ⅲ b層	黒褐 (10YR 3/2)	20cm	シルト質で第Ⅲ a層に比べて若干軟らかい。
第Ⅳ層	黄橙 (10YR 7/8)		氾濫源土。シルト質でしまりがある。

※第Ⅲ a・b層が古代から中世の遺物包含層である。

第4図 宮田遺跡基本土層柱状図

第Ⅱ章 調査の記録

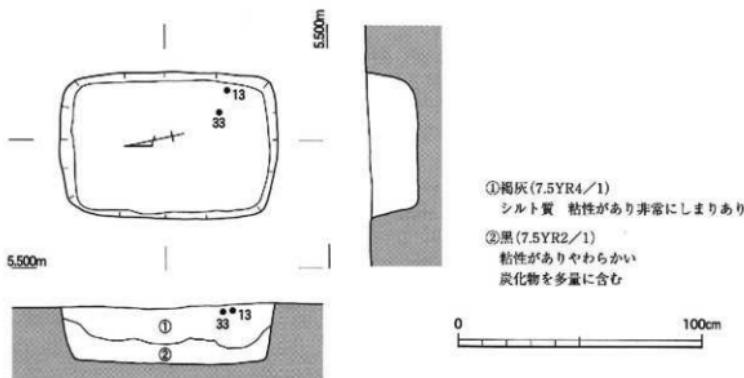
第1節 調査の概要

第Ⅰ層（表土）・第Ⅱ層（現代の耕作土）を重機により除去し、第Ⅲ層上面で遺構検出を行った結果、ピット4基を確認した。その後、第Ⅲ層（遺物包含層）を人力による掘り下げを行い、土師器約4,100点、須恵器約300点、布痕土器3点、劔鍾車1点、土錘1点、磁器3点等が出土した。また、第Ⅳ層上面で遺構検出を行った結果、土坑1基とピット31基を検出した。

第2節 遺構

1 1号土坑（SC1）（第5・6図）

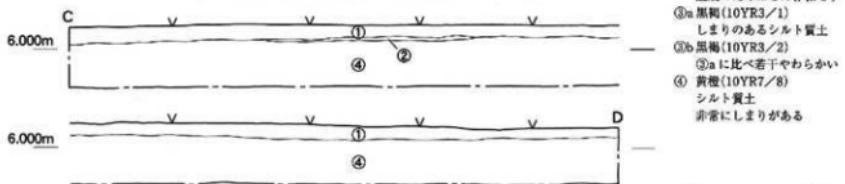
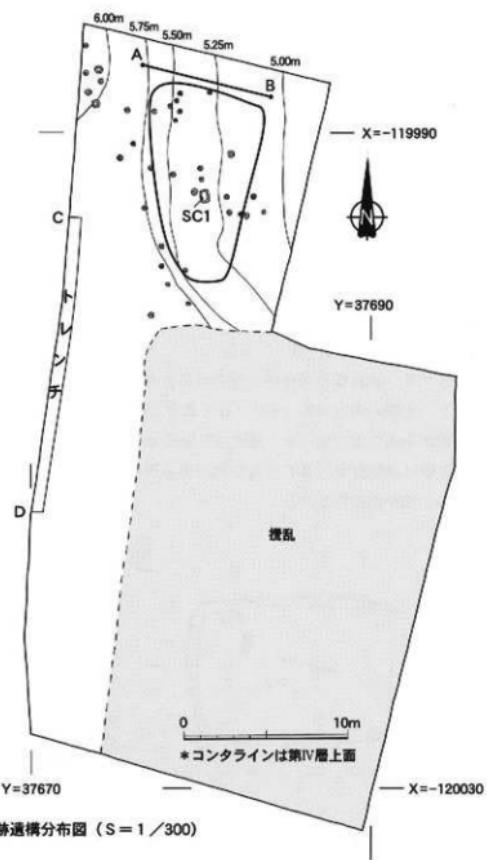
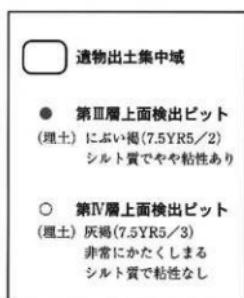
D-3グリッド西側の第Ⅳ層上面で検出された。長軸約90cm、短軸約60cm、検出面からの深さ約20cmを測り、主軸の方向はN-13°-Wである。平面プランは隅丸長方形を呈し、壁面が真っ直ぐに立ち上がる底が平らな土坑である。埋土は2層に分層できる。上層は粘性があり非常にしまった褐色土であり、下層は炭化材を多量に含む粘性のある黒色土である。上層で須恵器の長頸壺（13）、瓶の把手部（33）の2点が出土している。



第5図 1号土坑実測図（S=1/20）

2 ピット（SH）（第6図）

第Ⅲ層上面で4基、第Ⅳ層上面で31基の計35基のピットを確認した。第Ⅲ層上面で検出したピットの平面プランは円形を呈し、径約20~23cm、深さ約8~23cmを測る。埋土はにぶい褐色弱粘質シルトである。第Ⅳ層上面で検出したピットの平面プランは円形もしくは梢円形を呈し、径約17~40cm、深さ約2~40cmを測る。埋土は非常にかたい灰褐色シルトである。なお、西側のピット群については造成時の削平による影響で全体的に残存状態が良くなかった。



第3節 遺物（第9～13図）

調査区北側の南西から北東へ緩やかに傾斜する斜面部（約60m²）に集中するかたちで第Ⅲ層土中から約4,400点（57.5kg）の遺物が出土している。内訳は土師器約4,100点（45.8kg）、須恵器約300点（11.3kg）、他に布痕土器3点・紡錘車1点・土錐1点・陶磁器3点等（0.4kg）である。遺物は第Ⅲ層の上層から下層までまんべんなく出土したが、新旧の遺物が混在しており上層と下層での遺物の出土状況は時期差を示すものではなかった。また、土器の特に集中する部分も見られた。なお、土師器は水分を含んだ粘質土に包含されていたため大多数が表面が溶けて摩滅していた。

以下、出土遺物についてその特徴を記述する。

須恵器（第9図）

壺蓋〈1～3〉1はつまみが高台状を呈し、口縁端部がシャープに屈曲する。天井部は回転ヘラ削りにより仕上げられ、風化が著しい。2はつまみが凝宝珠状で天井部に粗いヘラ削り跡を残す。3はつまみがボタン状を呈し、全体的に焼き歪みが見られる。器表面の調整は回転ナデ後、やや粗い回転ヘラ削りである。天井部に指頭痕を残す。

高台付壺〈4～9〉4～5は貼付高台であり、4は高台内面に貼付痕跡を残し、外面端部がやや外反する。5は体部が底部からやや外反しながら直線状に立ち上がり、高台の貼付痕跡が丁寧にナデ消されている。6は丁寧な調整が全体になされているが、焼成失敗による底部の焼きぶくれが著しくそのため全体も変形している。7～9は低く小さな高台を有し、体部がやや外反しながら直線的に立ち上がってている。高台は7・9がシャープな断面三角形、8がやや鈍い断面三角形を呈し、いずれも削り出しによるものである。

壺〈10～14〉10は短頸壺で肩が強く張り出し口縁端部はやや外反する。底部に焼成の際の焼きぶくれが見られる。11は壺の口縁部で外反しながら立ち上がり口唇部は丸みをおびる。12～14は長頸壺である。12・13は肩部がシャープに屈曲し明瞭な棱を持つ。高台は外方に開き、内外の貼付痕跡を丁寧にナデ消している。14は平底であり肩部がやや丸みをおびながら屈曲する。肩部上方に二条のヘラがきが認められ、また底部内面に明瞭な指押さえ痕跡を残す。外面の一部には自然釉がかかる。

提瓶〈15〉体部（被蓋部）である。内面は指押さえによる成形の痕跡（指頭痕）を明瞭に残す。

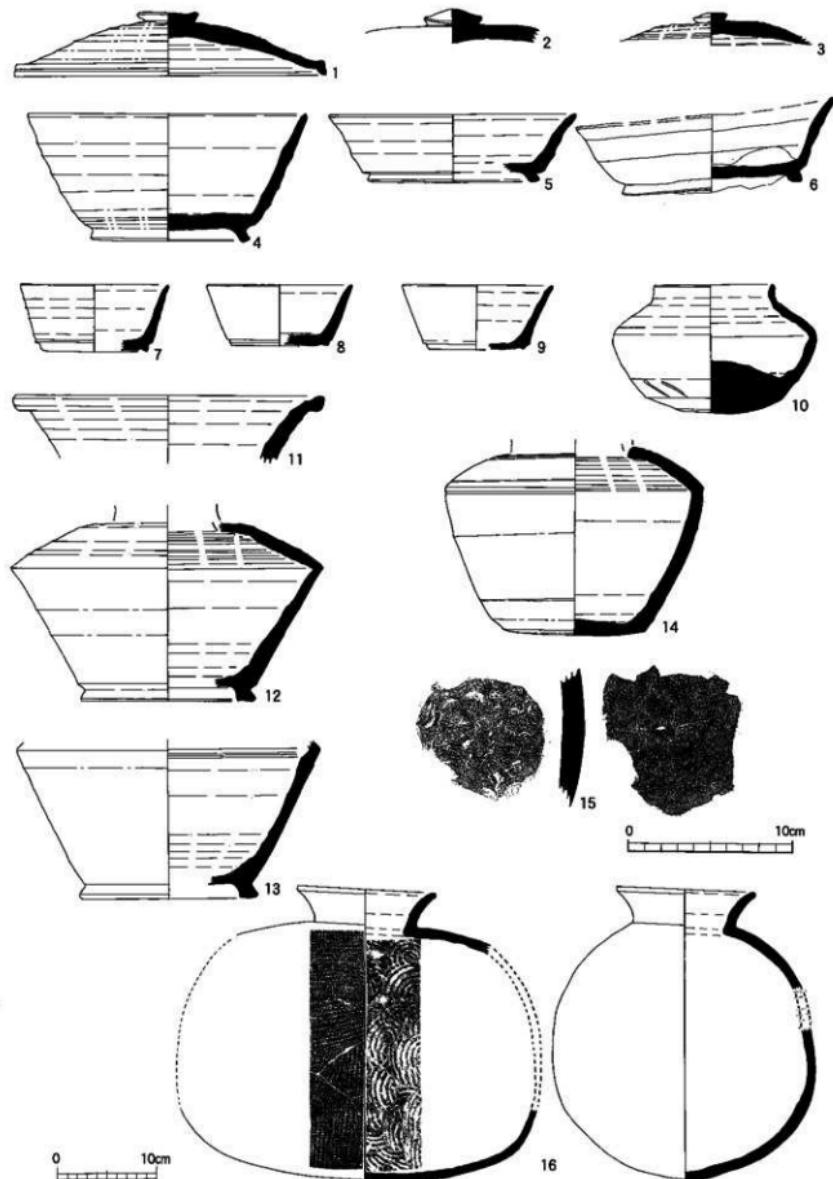
横瓶〈16〉調査区北側のD—2グリッド東側で一括出土した。本遺跡で最も大きい出土遺物であるが、全体的に歪みがあり、厚さも均一でない。器面調整は外面が格子目叩き後工具によるナデ、内面が同心円状の当具痕が確認できる。

土師器（第10～12図）

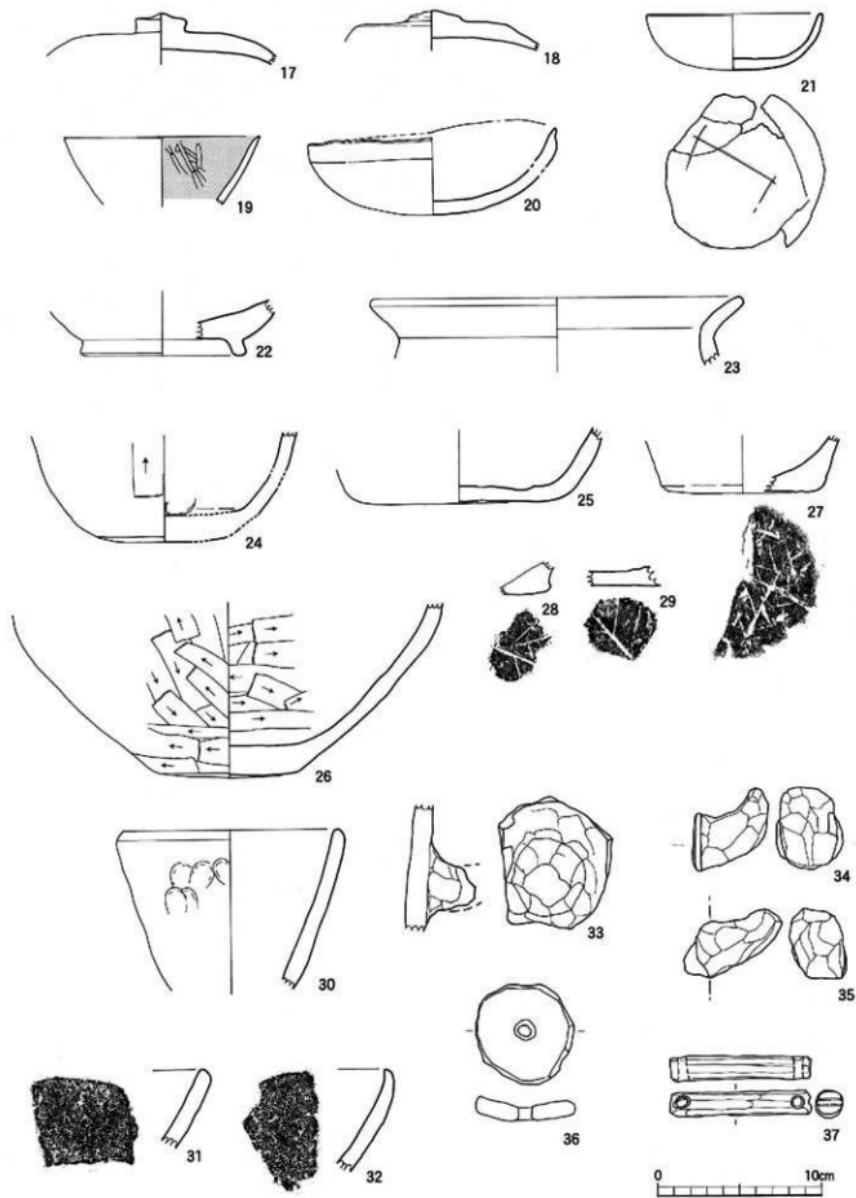
模倣壺蓋〈17・18〉つまみは17がボタン状を呈するが、18は形骸化している。ともに風化が著しく調整は不明である。

黒色土器〈19〉内面にはミガキが施されているが、やや粗い。

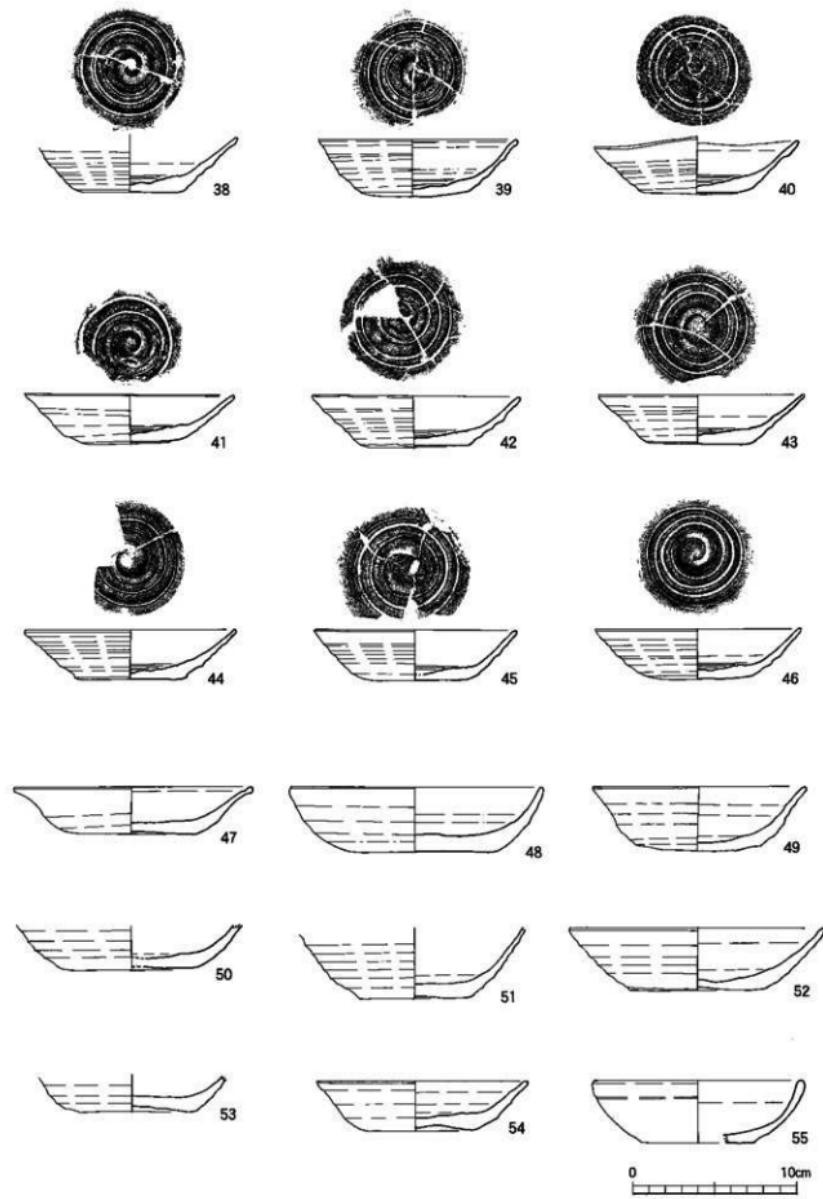
碗〈20・21〉20は口縁部がまっすぐ立ち上がり口唇部が僅かに外反する。剥離が著しい。21は底部外面に「十」印のヘラ記号を認める。



第9図 出土遺物実測図(1) (1~15: S=1/3 16: S=1/5)

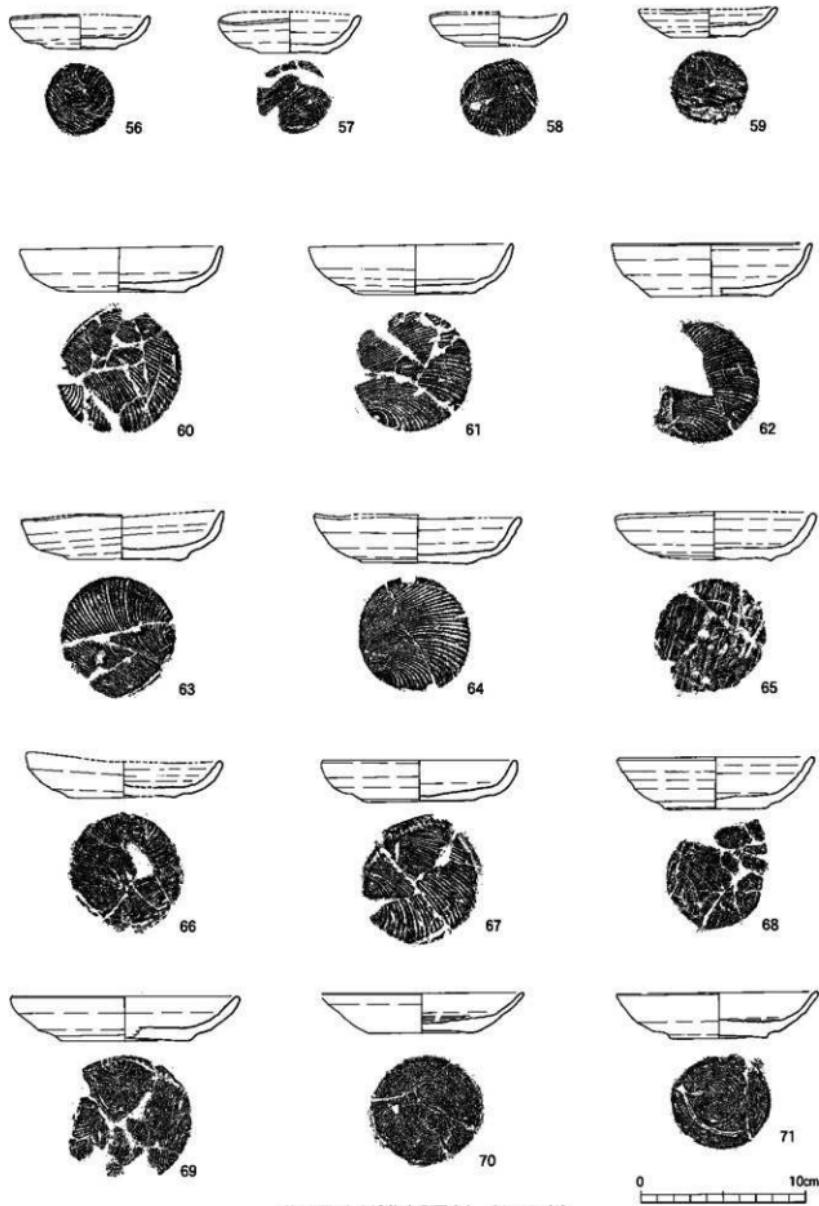


第10図 出土遺物実測図(2) (S=1/3)



第11図 出土遺物実測図(3) (S=1/3)

東上部拓影は内面



第12図 出土遺物実測図(4) (S=1/3)

高台付碗〈22〉全体の風化が著しく調整及び成形技法は不明である。

壺〈23、26~29〉23は頸部が「く」字状を呈する口縁部である。26は厚手の平底である。調整は内外面とも横または斜め方向のケズリである。27は内外面ともに工具によるナデ調整である。28・29は風化が著しく調整は不明である。いずれも底部には明瞭な木葉痕を残す。

壺〈24・25〉24は内面がナデ調整で指頭圧痕が残る。外面は下から上方向へのケズリである。全体的に剥離が著しい。25は平底である。風化が著しく詳細は不明である。

製塙土器〈30~32〉30は逆円錐形を呈し口径は約15cmを測る。外面には指押さえ痕跡を残し、内面は布痕を留めるが風化が著しく明瞭ではない。口唇部はヘラ成形である。小田和利氏分類（小田1998）のⅢ d類に属するものと思われる。31・32も逆円錐形を呈すると思われ、外面は指押さえ痕跡を残し、内面には布痕が認められる。いずれも口唇部はヘラ成形であり、32は口縁端部がやや内湾気味である。同じくⅢ類に属するものと思われる。破片が小片であるために詳細は不明である。いずれも風化が著しい。

瓶〈33~35〉いずれも断面梢円形をなす牛角状の把手である。33は器面をヘラで粗くなじた後、肩部に貼り付けヘラで粗く成形しなじでついている。34・35は粗いナデ成形を施している。

紡錘車〈36〉土師質土器の底部を転用している。側面を打ち欠き成形した後、中央には5mmの孔を両方から穿っている。

土鍤〈37〉形状は外面をヘラナデにより成形された棒状である。両端に穿孔及び溝を有している。おそらくヒモ状のものを通し結びつけ使用されていたものと考えられる。

坏〈38~55〉は底部内面に渦巻状調整を有するもの〈38~46〉を(A)、有しないもの〈47~55〉を(B)とした。

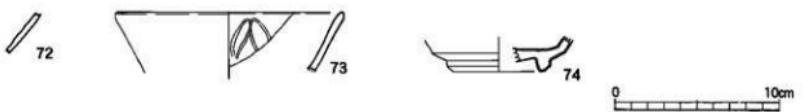
A：口径12.0~12.7cm・底径6.4~6.7cm・器高3.0~3.5cmの範疇に収まり、いずれも底部切り離し技法はヘラ起しであり、外面に纏織痕跡を明瞭に残している。

B：いずれも底部切り離し技法はヘラ起しであり、47・48・50・53~55は、切り離し後、底部立ち上がり部を、ヘラ削りによって仕上げている。47は体部がやや開きながら直線的に立ち上がり口縁端部はやや外反する。48・49は体部がやや開きながら直線的に立ち上がる。50~54は体部がやや開きながら直線的に立ち上がる。やや上げ底状である。55は体部がやや丸みをおびながら立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられている。

皿〈56~71〉は底部切り離し技法が静止糸切りによるもの〈56~69〉を(A)、回転糸切りによるもの〈70・71〉を(B)とした。

A：56~59は口径7.9~8.3cm・底径4.3~4.6cm・器高1.7~2.3cmの範疇に収まる小型の皿であり、体部は丸みを帯びながらやや内湾気味に立ち上がる。57は底部外面に板状圧痕が認められる。60~68は口径11.5~12.3cm・底径6.2~7.6cm・器高2.2~3.2cmの範疇に収まる中型の皿である。60~67は体部が丸みをおびながらやや内湾気味に立ち上がり、68は体部が丸みをおびながらやや直線的に立ち上がる、69は口径13.4cmと他に比べやや大型である。

B：70は体部が直線的に立ち上がる。71は底部が円盤高台状であり、体部が丸みをおびながらやや内湾気味に立ち上がる。



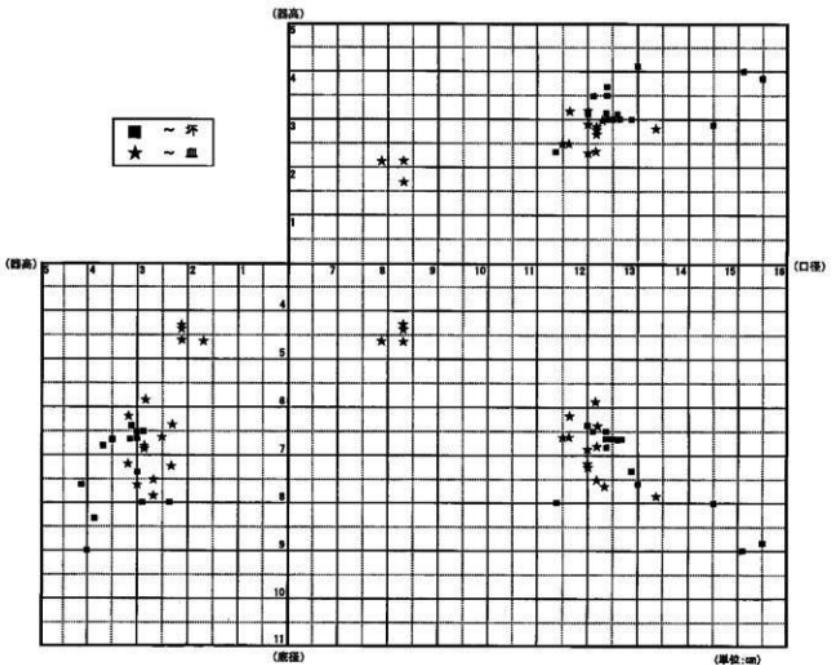
第13図 出土遺物実測図(5) ($S=1/3$)

陶磁器（第13図）

72 緑釉陶器で口縁部が外反する皿の口縁付近の小片と思われる。釉の発色はやや灰色がかった緑色を呈し、胎土は灰色で緻密である。9世紀の所産で畿内・東海窯と思われる。

73 龍泉窯系青磁の碗である。口縁端部はやや肥厚しており、体部内面には劃花文が施されている。胎土は灰白色で緻密であり、釉の発色はやや青味がかった緑色である。碗I類（太宰府市教育委員会2000）に属し12世紀中頃から後半である。

74 龍泉窯系青磁の高台付皿である。体部下位は腰が張り、高台は断面四角形を呈し、高台内部は露胎である。見込には花紋が施されている。胎土は灰白色を呈し緻密である。釉の発色はやや青味がかった緑色であるが、二次焼成によりくすんでいる。皿IV類に属し12世紀中頃から後半である。



第14図 土器（环・皿）法量分布図

第1表 出土遺物観察表(1)

番号	出土地	種類	器種	部位	法量(cm)		調査等			胎土 (混和材・混入物)	焼成	色調		備考	
					口径	底径	高さ	内面	外面			内面	外面		
1	第Ⅱ層	須恵器	壺蓋	口縁～大井	18.9		3.8	圓軸ナデ	ヘラ削り	精良	やや不良	灰白	灰 灰白	つまみ径:3.7cm 内面:黒化粧	
2	第Ⅱ層	須恵器	壺蓋	天井付近				圓軸ナデ	ヘラ削り		1~3mmの砂粒を多く含む 1mm程度の石片を含む	不良	灰白	灰白	つまみ径:3.4cm 外側:黒化粧
3	第Ⅱ層	須恵器	壺蓋	天井付近				圓軸ナデ後、 ナデ	圓軸ナデ後、 ヘラ削り	精良	やや不良	灰	灰	つまみ径:2.1cm	
4	第Ⅱ層	須恵器	高台付耳	口縁～底部	(底) 16.9	9.6	7.8	圓軸ナデ	圓軸ナデ	精良	良好	灰	黄灰	貼付高台	
5	第Ⅱ層	須恵器	高台付耳	口縁～底部	15.0	10.5	4.1	圓軸ナデ	圓軸ナデ	精良	良好	黄灰	灰	貼付高台	
6	第Ⅱ層	須恵器	高台付耳	口縁～底部	15.7	11.0	41.0 ~ 60.0	圓軸ナデ	圓軸ナデ	精良	不良	灰	灰		
7	第Ⅱ層	須恵器	高台付耳	口縁～底部	9.0	6.4	4.1	圓軸ナデ	圓軸ナデ	精良	良好	灰	灰		
8	第Ⅱ層	須恵器	高台付耳	口縁～底部	8.8	3.7	5.7	圓軸ナデ	圓軸ナデ	精良	良好	灰白	灰		
9	第Ⅱ層	須恵器	高台付耳	口縁～底部	9.2	5.8	3.9	圓軸ナデ	圓軸ナデ	精良	やや不良	灰白	灰白		
10	第Ⅱ層	須恵器	切妻壺	腹部～底部			8.3	圓軸ナデ	圓軸ナデ	精良	やや良	灰	灰白		
11	第Ⅱ層	須恵器	壺	口縁～底部	(底) 18.9			圓軸ナデ	圓軸ナデ	精良	やや不良	黄灰	灰黃		
12	第Ⅱ層	須恵器	長颈瓶	頸部～底部	(底) 10.5			圓軸ナデ	上位:圓軸ナデ 下位:ヘラ削り	精良	やや不良	灰白	黄灰	貼付高台	
13	S C 1	須恵器	長颈瓶	頸部～底部	10.8			圓軸ナデ	ヘラ削り (単位不明)	精良	やや不良	灰白	灰白	貼付高台 外側:黒化粧	
14	第Ⅱ層	須恵器	長颈瓶	頸部～底部	8.6			圓軸ナデ	上位:圓軸ナデ 下位:ヘラ削り	精良	やや不良	黄灰	灰白	外側:自然輪 付着	
15	第Ⅱ層	須恵器	捷取	体部				ナデ 指おさえ	カキ目	精良	やや良	灰	灰白		
16	第Ⅱ層	須恵器	楕瓶	口縁～底部	13.8		29.4	上位:圓軸ナデ後 工具による擦痕ナデ 下位:圓軸ナデ 工具による擦痕ナデ	上位:圓軸ナデ 下位:擦子ナデ ナデ:擦子ナデ 工具による 擦痕	精良	不良	灰	灰	擦痕 つまみ径:3.0cm 内面:黒化粧	
17	第Ⅱ層	土師器	壺蓋	体部～つまみ				調整不明	調整不明		2mm以下の黄灰・灰・褐色粒を 少量含む	やや不良	板	板	擦痕 つまみ径:3.5cm 内面:黒化粧
18	第Ⅱ層	土師器	壺蓋	体部～つまみ				調整不明	調整不明		1mm以下の灰・褐色粒を 少量含む	やや不良	板	板	擦痕 つまみ径:3.5cm 内面:黒化粧
19	第Ⅱ層	墨色土器	壺	口縁～肩部	(底) 11.9			圓軸ナデ後、 ミガキ (単位不明)	圓軸ナデ	さめ模やかな擦痕を 含む	良好	黑	淡黄 墨	内面: 黑化 粧	
20	第Ⅱ層	土師器	壺	口縁～底部	15.0	5.0	49.0 56.0	圓軸ナデ (底) 5.0	上位: 橋ナデ 下位: ミガキ		2mm以下の茶褐色粒を 含む	やや不良	灰白	灰白	擦痕が著しい
21	第Ⅱ層	土師器	壺	口縁～底部	10.6	2.5	3.4	ミガキ (単位不明)	ミガキ (単位不明)	あめ模やかな擦痕 透明光沢粒を含む	やや良	浅黄褐	浅黄褐	ヘラ記号 内面: 黑化 粧	
22	第Ⅱ層	土師器	高台付耳	底部			10.1	調整不明	調整不明	0.5mm以下の茶褐色透明光 沢粒 1mm以下の浅黄色 粒を含む	やや不良	にぶい板	にぶい板		
23	第Ⅱ層	土師器	壺	口縁	(底) 22.8			横方向のナデ	ナデ	3mm以下の茶褐色 2mm以下の灰白色粒を多 く含む	良好	にぶい板	にぶい板		
24	第Ⅱ層	土師器	壺	胴部下～底部	(底) 5.0			ナデ 指おさえ	削り(下→上)	10mm以下の赤褐色・黒褐色 茶褐色粒を含む	やや不良	にぶい黄 青	にぶい黄 青	内面:一部黒 変	
25	第Ⅱ層	土師器	壺	胴部下～底部	13.1			調整不明	調整不明	10mm以下の赤褐色・黒褐色 茶褐色粒を含む	不良	浅黄褐	浅黄褐	黒化粧	

第2表 出土遺物観察表(2)

番号	出土地	種類	器種	部位	法 番(cm)			調 整 等			胎 土 (混和材・混入物)	焼成	色 調		備 考
					口径	底径	高さ	内 面	外 面	切り離し技法			内面	外 面	
26	第三層	土師器	甕	側部下～底部	(底)8.4			楕または斜方向の のケズ)	楕または斜方向の のケズ)		2mm以下の灰・黄灰・褐色 粒を少量含む	やや 不良	黄灰	にい・黄緑	内面・黒茶
27	第三層	土師器	甕	底部	(底)9.0			工具によるナギ (単位不明)	工具によるナア		微細な透明・半透明光沢 粒 2mm以下の中・褐色粒 を少量含む	やや 不良	にい・黄緑	にい・黄緑	内面・黒茶 木の葉痕
28	第三層	土師器	甕	底部				調整不明	調整不明		5mm以下の灰・黄灰・黒 褐色粒を含む	やや 不良	棕	にい・黄緑	木の底 黒化著しい
29	第二層	土師器	甕	底部				調整不明	調整不明		4mm以下の灰・乳白・褐色 粒を含む	やや 不良	にい・黄緑	にい・黄緑	木の底 黒化著しい
30	第二層	土師器	鉢	口縁～ 底部下	(底) 14.5			布痕直抜	ナテ 直抜痕		5mm以下褐色粒 3.5mm 以下の白色粒を含む	良好	棕	棕	製造土器 内面・黒化著 しい
31	第二層	土師器	鉢	口縁				布痕直痕	ナテ		4mm以下の褐色粒 2mm 以下の灰白色粒を含む	良好	棕	棕	製造土器 内外面・黒化 気味
32	第二層	土師器	鉢	I.I縫				布痕直痕	ナテ		7.5mm以下の褐色・褐色 粒を含む	良好	赤褐	にい・棕	製造土器 内面・黒化 気味
33	S.C.1	土師器	瓶	把手部				楕いへらで整形			1～1.5mmの赤褐色粒を 含む	やや 不良	にい・黄緑	明赤褐色	一部欠損
34	第二層	土師器	瓶	把手							1～1.5mmの赤褐色粒を 含む	良好	にい・棕	棕	一部欠損
35	第二層	土師器	瓶	把手							僅かに1mmの赤褐色粒を 含む	良好	にい・棕	明褐灰	一部欠損
36	第二層	一	紡錘瓶	一	高径 4.0	孔径 0.5	厚さ 0.6								
37	第二層	一	土壺	一	全長 8.6	直径 1.3	孔径 0.4		ハラナゲ						
38	第二層	土師器	壺	口縁～ 底部	(底) 6.5	3.4		回転ナテ 底面：渦巻状調 整	回転ナテ	ヘラ削し	2mm以下の灰・赤褐色粒 を含む	良好	にい・棕 にい・黄緑	にい・棕	
39	第二層	土師器	壺	口縁～ 底部	12.1	6.5	3.5	回転ナテ 底面：渦巻状調 整	回転ナテ	ヘラ削し	2mm以下の灰・褐色粒を 含む	良好	にい・棕	にい・棕	
40	第二層	土師器	壺	口縁～ 底部	12.4	6.7	3.5	回転ナテ 底面：渦巻状調 整	回転ナテ	ヘラ削し	5mm以下の灰・赤褐色粒 を含む	良好	淡棕	淡棕	
41	第二層	土師器	壺	口縁～ 底部	12.7	6.6	3.0	回転ナテ 底面：渦巻状調 整	回転ナテ	ヘラ削し	2mm以下の灰・灰・赤褐 色粒を含む	良好	にい・棕	にい・棕	
42	第二層	土師器	壺	口縁～ 底部	12.6	6.7	3.1	回転ナテ 底面：渦巻状調 整	回転ナテ	ヘラ削し	2mm以下の灰・赤褐色粒 を含む	良好	棕	にい・棕	
43	第二層	土師器	壺	口縁～ 底部	12.4	6.5	3.0	回転ナテ 底面：渦巻状調 整	回転ナテ	ヘラ削し	2mm以下の灰・赤褐色粒 を含む	良好	にい・棕 にい・黄緑	にい・棕	
44	第二層	土師器	壺	口縁～ 底部	12.5	6.6	3.0	回転ナテ 底面：渦巻状調 整	回転ナテ	ヘラ削し	4mm以下の茶色粒を少量 含む	良好	浅黄棕	浅黄棕	
45	第二層	土師器	壺	口縁～ 底部	(底) 12.0	6.4	3.1	回転ナテ 底面：渦巻状調 整	回転ナテ	ヘラ削し	2mm以下の茶色粒を少量 含む	良好	にい・棕	にい・棕	
46	第二層	土師器	壺	I.I縫～ 底部	12.4	6.7	3.1	回転ナテ 底面：渦巻状調 整	回転ナテ	ヘラ削し	3mm以下の灰・乳白・赤褐色 粒を含む	良好	浅黄棕	にい・棕	
47	第二層	土師器	壺	口縁～ 底部	(縫) 14.5	8.0	2.9	回転ナテ	回転ナテ	ヘラ削し	赤褐色やかな砂粒を含む	良好	にい・棕	棕	内外面・黒化 気味
48	第二層	土師器	壺	口縁～ 底部	(縫) 15.1	9.0	4.0	回転ナテ	回転ナテ	ヘラ削し	1mm以下の赤茶色粒 多 め細やかな無色透明光沢 粒を含む	良好	浅黄棕	浅黄棕	内面・一部黒 外側・黒化 気味
49	第二層	土師器	壺	口縁～ 底部	(縫) 13.0	7.6	4.1	回転ナテ	回転ナテ	ヘラ削し	2mm以下の灰・乳白・黃 褐色粒を少量含む	良好	棕	棕	
50	第二層	土師器	壺	体部～ 底部		8.4		回転ナテ	回転ナテ	ヘラ削し	1mm以下の赤褐色粒 ま た赤褐色やかな砂粒を含む	良好	棕	棕	

第3表 出土遺物観察表(3)

番号	出土地	種類	器種	部位	法量(cm)			調査等			粘土 (混和材・混入物)	焼成	色調		備考
					上端	底径	高さ	内面	外面	切り離し技法			内面	外面	
51	第Ⅱ層	土器部	环	口縁～底部		6.8		回転ナダ	回転ナダ	ヘラ起し	2mm以下の灰・褐色粒を含む	良好	橙	橙	
52	第Ⅱ層	土器部	环	口縁～底部	(底) 15.5 (底) 8.3	3.8		回転ナダ	回転ナダ	ヘラ起し	きめ細やかな砂粒を含む	良好	橙 にぼい橙	橙 にぼい橙	
53	第Ⅱ層	土器部	环	口縁～底部	(底) 11.4 (底) 2.3	8.0		回転ナダ	回転ナダ	ヘラ起し	きめ細やかな砂粒を含む	良好	橙	浅黄橙	内部陶化 知味
54	第Ⅱ層	土器部	环	口縁～底部	(底) 12.9 (底) 7.3	3.0		回転ナダ	回転ナダ	ヘラ起し	きめ細やかな砂粒を含む	良好	にぼい黄 灰白	にぼい黄	
55	第Ⅱ層	土器部	环	口縁～底部	(底) 12.4 (底) 5.3	3.7		回転ナダ	回転ナダ	ヘラ起し	1mm以下の赤茶色粒を含む	良好	浅黄橙 灰白	にぼい黄 灰白	
56	第Ⅱ層	土器部	小皿	口縁～底部	8.3	4.5	2.1	回転ナダ	回転ナダ	静止糸切り	2mm以下の赤茶色粒を含む	良好	にぼい橙 浅黄橙	にぼい橙	円盤高台状
57	第Ⅱ層	土器部	小皿	口縁～底部	8.3	4.4	20.0cm ～ 2.3cm	回転ナダ	回転ナダ	静止糸切り	2mm以下の赤茶色粒を含む	良好	にぼい橙 浅黄橙	橙	円盤高台状 板状底
58	第Ⅱ層	土器部	小皿	口縁～底部	7.9	4.6	2.1	回転ナダ	回転ナダ	静止糸切り	3mm以下の赤茶色粒を少量含む	良好	にぼい橙	にぼい橙	円盤高台状
59	第Ⅱ層	土器部	小皿	口縁～底部	8.3	4.6	1.7	回転ナダ	回転ナダ	静止糸切り	2mm以下の赤茶色粒を多量に含む	良好	浅黄橙	にぼい橙	円盤高台状 内面・底面 外側：スミ付青
60	第Ⅱ層	土器部	皿	口縁～底部	12.2	7.5	2.7	回転ナダ	回転ナダ	静止糸切り	2mm以下の黒・灰・赤褐色 粒を含む	良好	浅黄橙	浅黄橙	円盤高台状
61	第Ⅱ層	土器部	皿	口縁～底部	(底) 12.3	7.6	3.0	回転ナダ	回転ナダ	静止糸切り	1mm以下の砂粒を含む	良好	にぼい黄 灰白	にぼい黄 灰白	円盤高台状
62	第Ⅱ層	土器部	皿	口縁～底部	(底) 12.0	(底) 7.2	3.2	回転ナダ	回転ナダ	静止糸切り	2mm以下の赤褐色 1mm以下の黒・灰褐色粒を含む	良好	浅黄橙 浅黄	浅黄橙 浅黄	円盤高台状
63	第Ⅱ層	土器部	皿	口縁～底部	12.0	7.2	2.3	回転ナダ	回転ナダ	静止糸切り	1mm以下の茶色粒を少量含む	良好	浅黄橙	にぼい黄 灰白	円盤高台状
64	第Ⅱ層	土器部	皿	口縁～底部	12.2	6.8	2.9	回転ナダ	回転ナダ	静止糸切り	1mm以下の黒・灰褐色粒を含む	良好	にぼい黄 灰白	にぼい黄 灰白	円盤高台状
65	第Ⅱ層	土器部	皿	口縁～底部	12.0	6.9	2.9	回転ナダ	回転ナダ	静止糸切り	1mm以下の黒・灰褐色粒を含む	良好	橙 にぼい黄 灰白	橙 にぼい黄 灰白	円盤高台状
66	第Ⅱ層	上部器	皿	口縁～底部	11.6	6.6	22.0cm ～ 28.0cm	回転ナダ	回転ナダ	静止糸切り	2mm以下の赤褐色粒 1mm以下の黒・灰褐色粒を含む	良好	にぼい橙 にぼい黄 灰白	にぼい橙 にぼい黄 灰白	円盤高台状
67	第Ⅱ層	上部器	皿	口縁～底部	11.5	6.6	2.5	回転ナダ	回転ナダ	静止糸切り	1mm以下の茶色粒を少量含む	良好	浅黄橙	浅黄橙	円盤高台状
68	第Ⅱ層	土器部	皿	口縁～底部	(底) 11.6	(底) 6.2	3.2	回転ナダ	回転ナダ	静止糸切り	2mm以下の赤褐色粒を含む	良好	橙 にぼい黄 灰白	橙 にぼい黄 灰白	円盤高台状 内面・底面 外側：スミ付青
69	第Ⅱ層	土器部	皿	口縁～底部	(底) 13.4	(底) 7.9	2.7	回転ナダ	回転ナダ	静止糸切り	3mm以下の茶色粒を少量含む	良好	にぼい黄 灰白	にぼい黄 灰白	円盤高台状
70	第Ⅱ層	土器部	皿	口縁～底部	(底) 12.2	(底) 6.4	2.3	回転ナダ	回転ナダ	静止糸切り	2mm以下の茶色粒を少量含む	良好	にぼい橙 浅黄	にぼい橙 浅黄	内外面：陶化 美しい
71	第Ⅱ層	土器部	皿	口縁～底部	12.2	5.9	2.8	回転ナダ	回転ナダ	静止糸切り	きめ細かな砂粒を含む	良好	浅黄橙	にぼい橙	円盤高台状 内面：陶化 美しい
72	第Ⅱ層	縦輪 陶器	皿	口縁付近				施釉	施釉		灰色で微密	堅致	灰オーブ	灰オーブ	
73	第Ⅱ層	青磁	碗	口縁～体部	(底) 14.0			施釉	施釉		灰白で微密	堅致	緑青	緑青	
74	第Ⅱ層	青磁	皿	底部			5.6	施釉	施釉		灰白で微密	堅致	緑青	緑青	

第Ⅲ章 まとめ

宮田遺跡は大淀川下流域右岸の宮崎（沖積）平野低地に位置し、標高約6mを測る。当遺跡の西方3mには大淀6号墳が隣接する。現況では調査区に面した墳丘の東側3分の1程が削平を受けていたが、構築時には墳丘の一部が調査区内にあったと推察され、今回の調査で古墳関連の遺構・遺物の検出が期待された。以下、調査で確認された遺構と遺物について簡単にまとめてみたい。

遺物：須恵器は全体的に器形が歪んだものや焼成不良品が多く在地系と思われる。土師器の壺・皿は底部切り離し技法がヘラ起しと糸切りの両方が出土しており、ヘラ起しから糸切りへの変遷を考える上で貴重な資料が得られたと考える。また、壺（38～46）は底部内面に渦巻状調整痕を明瞭に残しており出土例をあまり見ないものである。今回出土した土師器の壺・皿の中には第14図からわかるように法量が近似値を示すグループが見られることからそれらは規格的に生産されたものであると考えられる。陶磁器としては綠釉陶器や龍泉窯系青磁がごく僅かではあるが出土している。出土遺物は9世紀から13世紀の範疇に収まるものと思われる。

遺構：1号土坑は前述のように下部に多量の炭化材を含んでいること、および甌の破片が出土していることから煮炊施設であった可能性も考えられる。時代については遺構内より出土した須恵器から古代中頃と思われる。ピットについては削平により消滅した可能性もあり、今回検出したピット群の中では規則性がなく、その性格・機能等については特定できなかった。また、年代については出土遺物がまったく無く、詳細は不明であるが、埋土状況から古代から中世の時期に収まると思われる。

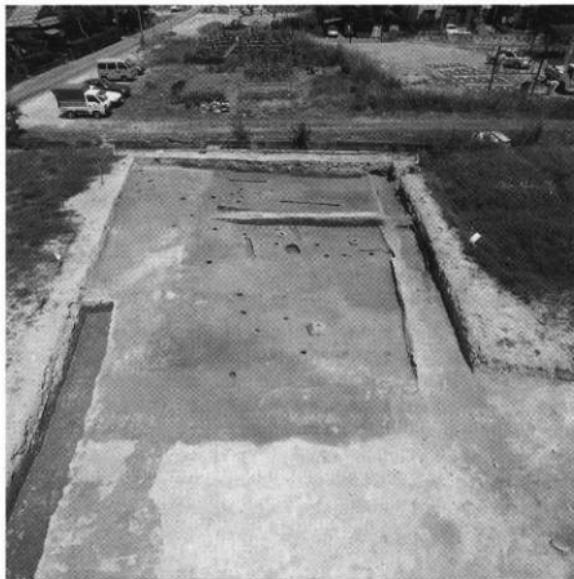
今回の調査では土坑1基、ピット35基、土師器・須恵器等4,400点余りを確認した。当初想定された大淀6号墳関連遺構については、調査区西側に南北に確認トレンチ（第6図）を設定し、土層断面（第8図）及び平面観察により周溝の検出を試みたが確認できなかった。今回の調査はごく小面積であったため、遺跡の全容を解明するには至らなかったが、前述したように須恵器や土師器の中には貴重な資料も出土しており、この周辺の人々の古代から中世における生活の様相を解明する一助となり得ると考えられるのではないだろうか。

〈参考文献〉

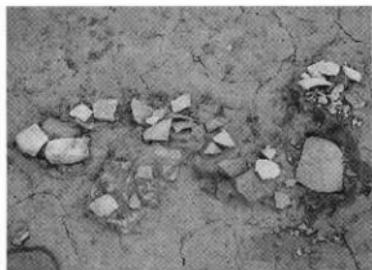
- | | | |
|-----------|------|---|
| 宮崎県教育委員会 | 1977 | 「余り田遺跡」宮崎県文化財調査報告書1集 |
| 宮崎県教育委員会 | 1988 | 「西ノ原遺跡」—大淀1号古墳— |
| 宮崎県教育委員会 | 1988 | 「街路目通り改良工事に伴う発掘調査略報—大淀6号古墳・多宝寺遺跡・梅現谷遺跡」宮崎県文化財調査報告書31集 |
| 宮崎県教育委員会 | 1988 | 「竹ノ下遺跡現地説明会資料」 |
| 小田 和利 | 1988 | 「製塙土器からみた律令期急落の様相」『九州歴史資料館研究論集』九州歴史資料館 |
| 宮崎県教育委員会 | 2000 | 「石用遺跡・友尻遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書22集 |
| 宮崎県教育委員会 | 2000 | 「石塚城跡・島ノ子遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書23集 |
| 太宰府市教育委員会 | 2000 | 「太宰府条坊跡IV」太宰府市の文化財 第49集 |
| 宮崎県教育委員会 | 2001 | 「井尻遺跡・雀田遺跡・沖ノ田遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書35集 |
| 宮崎県教育委員会 | 2002 | 「本城跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書60集 |
| 宮崎県教育委員会 | 2002 | 「鶴尾遺跡・坂ノ下遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書65集 |



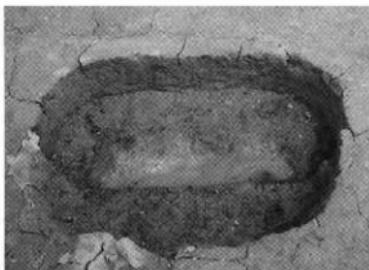
宮田遺跡全景（西から）



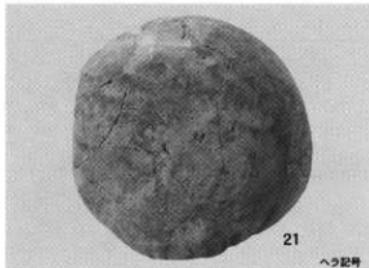
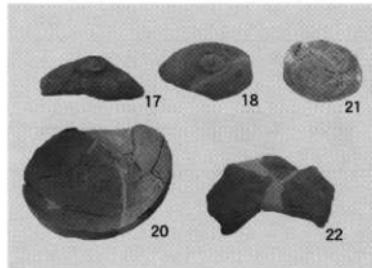
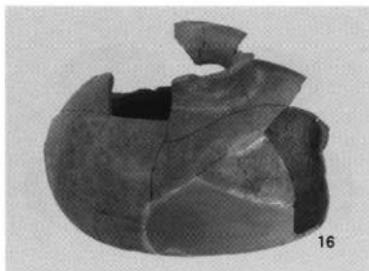
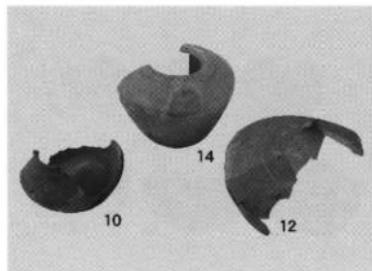
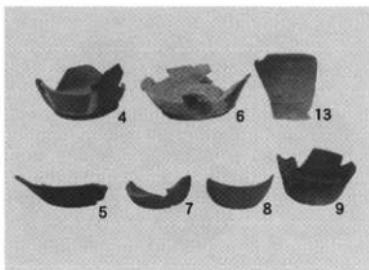
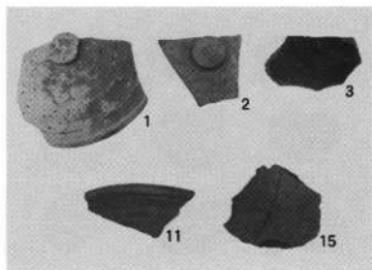
宮田遺跡発掘状況（南から）



遺物出土状況 (16)



1号土坑完掘状況

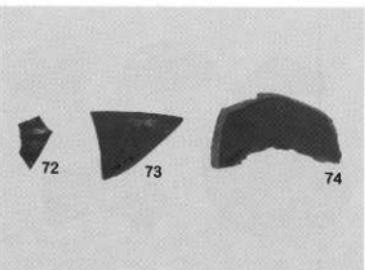
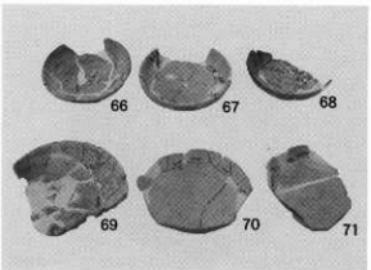
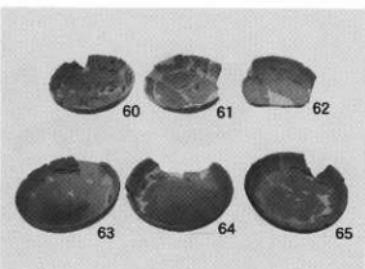
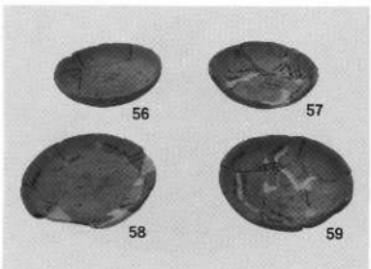
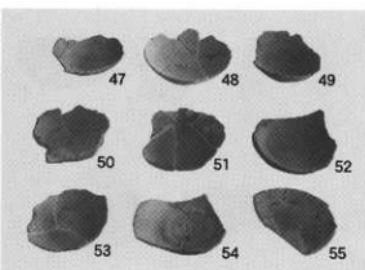
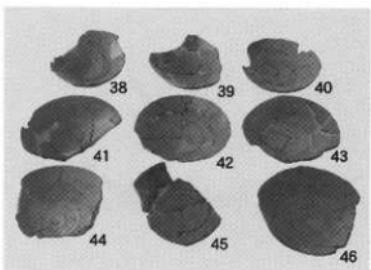
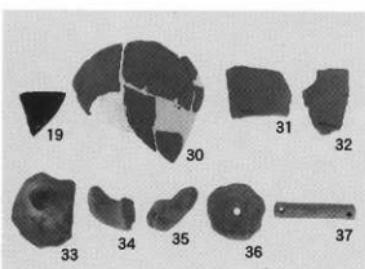
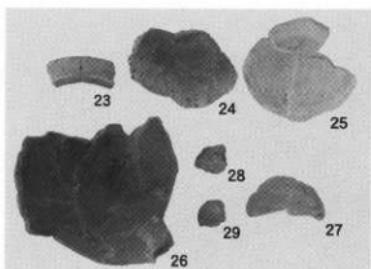


出土遺物 (1)

图

版

3



出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	みやたいせき							
書名	宮田遺跡							
副書名	生目通線住宅地閑連公共施設整備事業(新大塚工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第88集							
編集執筆担当者名	南正覚雅士・和田理啓							
編集機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月日	西暦2004年2月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 經	調査期間	調査面積	調査原因	
みやたいせき 宮田遺跡	みやざきけん 宮崎県 みやざきし 宮崎市 おおつかもとう 大塚町 あざみやた 字宮田	市町村 45201	遺跡番号 21	31度 54分 48秒 付 近	131度 22分 35秒 付 近	2003.6.20 ~ 2003.8.18	450m ²	生目通線住宅 地閑連公共 施設整備事業 (新大塚工区) に伴う埋蔵文 化財発掘調査
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
散 布 地	古 代	土 坑 ピット	須 恵 器 紡 锤 車 綠釉陶器					
	中 世	ピット	土 鍋 器 龍泉窯系青磁 土 錘					

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第88集

宮 田 遺 跡

生口通線住宅宅地開発公共施設整備事業（新大塚工区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 平成16年2月発行

編集発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎郡都佐土原町大字下那珂4019番地
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印 刷 田中印刷有限会社
〒880-0022 宮崎市大橋3丁目110番地
TEL 0985-28-4724 FAX 0985-20-9285
